

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24500892

研究課題名(和文) 家庭科における保育学習のカリキュラム・イノベーション研究

研究課題名(英文) The Study of curriculum innovation about ECEC in home economics

## 研究代表者

倉持 清美 (Kuramochi, Kiyomi)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：30313282

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：保育学習の社会的必要性が高まり、ふれあい体験が中学において必修化したが、学びを深めるカリキュラムの構築までは至っていない。本研究では、これまでの研究の蓄積と先行研究から、保育学習を「ストーリー性のあるカリキュラム」「家庭科の他分野の内容とリンクしたカリキュラム」「社会的なレリバンスを備えたカリキュラム」の3つの側面から理論的検討を進め、これらの側面を実現するカリキュラム開発を行った。そして、その成果をガイドブックにまとめ、配布した。

研究成果の概要(英文)：Young people have fewer opportunities to interact with children in Japan. It is important for younger people to study how to care children as pre-parenting education. Expectation for Experience in early Childhood Education and Care (ECEC) is growing. But curriculum including ECEC is insufficient and it is not enough for students to learn caring children. A theoretical study took place regarding the curriculum from three viewpoints of having the plot from pre ECEC to post ECEC, linking with the contents of the home economics excluding the caring children, and having the social relevance. The curriculum was developed for achieving three viewpoints. We presented the result of this study in the guidebook.

研究分野：保育心理学

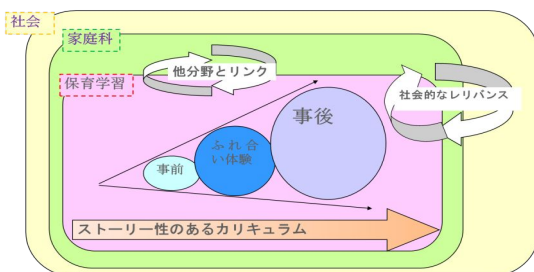
キーワード：保育学習 ふれあい体験 家庭科 中学生 カリキュラム イノベーション

### 1. 研究開始当初の背景

少子化、児童虐待の問題など、家庭における子どもの問題がクローズアップされるようになった現在、学校教育における保育学習への期待が高まっている。乳幼児とのかかわり方の工夫をする力を育成するためには、体験学習を組み込んだ学習が効果的であると言われている。しかし、課題も指摘されている。体験学習を効果的にするための学習内容や方法の解明である。これまで、ふれ合い体験の中身は、その事前事後の授業について十分に検討されてこなかった。ふれ合い体験を中核とした保育学習を充実したものにするためには、事前事後の学習も含む、一連のストーリー性のあるカリキュラムとすることが必要と考える。たとえば、国立教育政策研究所の調査報告(国立教育政策研究所教育課程開発センター, 2009)によると、中学生は「幼児の行動の特徴や様子を読み取る問題に課題を残している」と述べられている。幼児の行動の特徴や様子を読み取る能力には、中学生がこれまで経験してきたことが基礎となると思われるが、教室における事前学習によって体験学習を効果的にできるのではないかと考える。これまでの私たちの研究では、事前学習、ふれ合い体験内容、事後学習について個別に検討してきたが、これらに関連性を持たせ、ストーリーのある授業内容にしていくことが、ふれ合い体験を中核として学びの深いカリキュラム構築には必要である。さらに、授業時間数が少ない家庭科では、保育に関する授業以外の教科内容にもリンクし、それぞれの学びが充実することが求められている。

### 2. 研究の目的

保育学習の社会的必要性が高まり、中学校指導要領の改訂では、ふれ合い体験が必修となった。ふれ合い体験を中核として事前事後の授業を充実させることにより、深い学習ができる。しかし、保育学習カリキュラムの理論的・実践的な研究を評価とリンクさせたカリキュラム研究は少ない。本研究では、事前事後の授業を工夫してふれ合い体験を生かし、幼児理解を深めることができるカリキュラム・イノベーションを目指した。その際に、家庭科の他の分野ともリンクさせながら、中学生が実生活とレリバンス(つながり)を感じられるカリキュラムを開発し、その学習を評価して研究の妥当性・客観性を追究することとした。図にまとめると下記ようになる。



### 3. 研究の方法

本研究では、これまでの研究の蓄積と先行研究から、保育学習を「ストーリー性のあるカリキュラム」「家庭科の他分野の内容とリンクしたカリキュラム」「社会的なレリバンスを備えたカリキュラム」の3つの側面から理論的検討を進め、これらの側面を実現するカリキュラム開発を行うこととした。さらに、カリキュラムを通じた生徒の学びを質的に評価する方法として、レッジョ・エミリア市の取り組みを参考にした。そして、研究協力者の実践との連携を中軸にすえて、研究代表者および研究分担者が関与している他の学校とも連携し、開発したカリキュラムをもとに具体的な実践のあり方を探求し、実践の効果について検証した。実践の内省をくり返しながらカリキュラムの開発を進め、効果が確認できたカリキュラムについてはガイドブックを作成し、広く利用できるようにした。以上カリキュラム開発のポイントをまとめると下記ようになる。

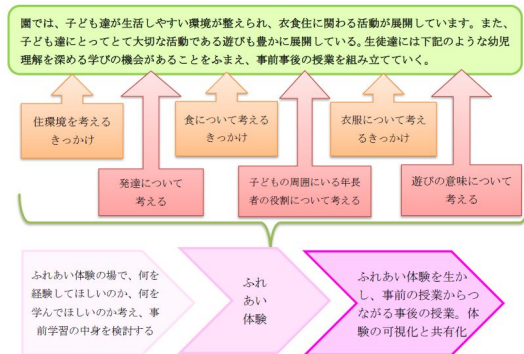
- (1)ふれあい体験で中学生が体験していることを丁寧にみとる。
  - ・教師と中学生のかかわり方を観察し記録する。
  - ・中学生がどのように感じ考えたのかを理解するためにナラティブに書かせる。
- (2)事前授業のデザインには、ふれあい体験に必要な知識と技能を入れる。
- (3)体験で感じ考えたことを可視化・共有化し発展させる事後授業をデザインする。
- (4)1・2・3を繰り返しながら授業カリキュラムを革新(イノベーション)していく。
- (5)ふれあい体験を衣食住の学習と結びつけてデザインすることも視野に入れる。

### 4. 研究成果

#### (1)ストーリー性のあるカリキュラム

ふれあい体験の事前事後学習も含めた一連の保育学習を研究することにより、ストーリー性のあるカリキュラムを開発し、ガイドブックに紹介した。図1に示すように、ストーリー性のあるカリキュラムを作成する要点をまとめた。

図1



ふれ合い体験の内容によって、生徒の学びは異なる。まず、教師は、幼児と中学生がふれ合う時の形態によって、経験することが違っ

てくることに注意しなくてはならない。生徒の実態によって、今経験させたいことは何かを考え、ふれあい体験の形態や内容を考えていく。また、訪問する園側の事情によって、形態や内容が決まることもある。そんな時も、そこからどのような経験ができるのかを予測し、事後の授業につなげていく。

そのためにも、生徒が、どのような保育ふれあい体験をしているかを、教師はメモや写真・ビデオを撮り、事後学習に活かせるようにすることが大事である。さらに、幼児とかかわった時の様子を生徒にナラティブに書かせることにより、時系列を追って、どのような園児と、どこでかかわり、その時々でどのようなことを考えたり、感じたりしていたかを、本人だけでなく教師も生徒の内面を理解することができる。また、ふれあい体験時の行動及び心情の再現(ナラティブ)の共有化から、幼児の発達の特徴や個性を理解し、どのようなかかわりが交流を促進させたり、させなかったりするかを発表からまとめることができる。さらに、自分の行動を分析し、改善する力をつけることにもつなげることができる。

## (2)家庭科の他分野とリンクした授業づくり

時間数が少ないという家庭科の現状を踏まえて、保育ふれあい体験を住環境学習とリンクさせる授業内容を開発した。住環境学習では、実践的・体験的な活動を取り入れて主体的に考えられるような学習課題を設定することが難しいとされている。しかし、保育ふれあい体験では、生徒達が子どもの生活を支えるために意図された環境を実際に観察することができ、その環境の中で幼児とともに様々な活動を展開する。こうしたふれあい体験の特長を生かした授業をデザインすることで、住環境学習と保育学習の両方の学びの充実が期待できると考えた。

授業では、子どもの育ちを支えるために配慮された保育所の環境に生徒たちが具体的に気づくことと、子どもの育ちのためにどのような環境を作っていたらよいかを主体的に考える学習を取り入れた。その際、環境建築家である仙田満氏の遊び空間の6分類を参照し、保育現場の環境を丁寧に見取ることから、子どもが育つ住環境づくりについて理解を深めるきっかけとした。ふれあい体験学習に住環境学習をリンクさせたことで、時間数が不足する中でも充実した指導を行うことができた。バリアフリーやユニバーサルデザインなどの学習をここに関連させて行うことが可能であることがわかった。

## (3)社会的なレリバンスを備えたカリキュラム

レッジョ・エミリア市での調査も踏まえ、保育学習での生徒の学びを明らかにするために、ふれあい体験後に生徒にナラティブ(体験した出来事を時系列に沿って自分の感

情も織り交ぜながら書いたもの)を書かせる実践を行った。生徒達は、保育学習を通じて、自分たちが幼い子を守り安心させられる力を十分に持っていることに気づいていた(図2)。これは、社会で必要とされる力である。生徒達がこうした力に気づくような授業展開の必要性を明らかにした。

図2

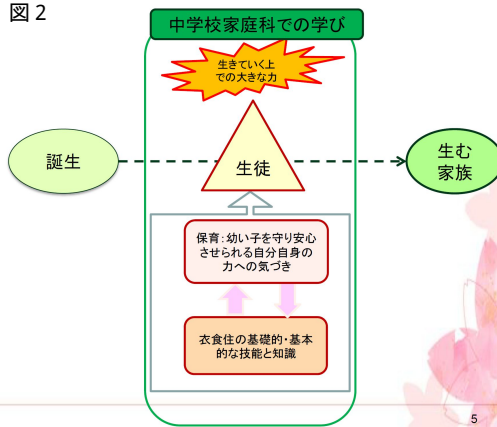


図2が示すように、私たちの多くは、生まれた家族と自分たちがこれから作る家族(生む家族)の二つを経験する。必ずしも自分の家族を肯定的にとらえられない状況にある生徒たちもいる。そうした生徒に、自分たち自身が家族を作り出す力を持っていると、自信をもたせるのも家庭科である。家族は、情緒的な安定が得られる場であることが何より大切である。そのために、心地よい住環境、栄養バランスのとれた食事、快適な衣服は必要条件であり、それを学ぶのが家庭科である。そして、保育では、ふれあい体験を通して、自分たちがすでに幼い子を守り安心させられる力を十分に持っていることに気づかせることができると思う。それが、中学生の自信となり、また、これからの生活を目的をもって考えるきっかけにもなるに違いない。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

### 〔雑誌論文〕(計 2 件)

叶内茜、倉持清美、中学生における幼児とのかかわり方と心情の関連：幼児とのふれ合いを拒否した生徒の事例に着目して、日本家庭科教育学会誌、査読有、58巻、2015、164-171

叶内茜、倉持清美、ふれあい体験時の幼児とのかかわりから引き出された中学生の経験内容、保育学研究、査読有、53巻、2015、151-161

### 〔学会発表〕(計 6 件)

叶内茜、倉持清美、金子京子、幼児とのふれあい体験における中学生の行動変化について 学校生活に課題を抱えた生徒の事例

を中心として、日本家庭科教育学会、2015年  
6月27日 鳴門教育大学

金子京子、倉持清美、阿部睦子、妹尾理子、  
望月一枝、ふれあい体験と食の学習を関連づ  
けた授業デザイン、日本家庭科教育学会、  
2015年 6月27日 鳴門教育大学

金子京子、妹尾理子、倉持清美、阿部睦子、  
望月一枝、保育学習と住環境学習を関連づ  
けた授業作り-ふれあい体験を生かして、日本  
家庭科教育学会、2014年 6月28日 岡山  
大学

金子京子、倉持清美、阿部睦子、妹尾理子、  
望月一枝、中学校の被服製作の振り返りとし  
てのナラティブの有効性、家庭科教育学会、  
2013年 6月29日 弘前大学

倉持清美、金子京子、望月一枝、妹尾理子、  
阿部睦子、ふれあい体験後のナラティブから  
中学生の幼児理解を探る、日本質的心理学会、  
2013年 8月30日 立命館大学

倉持清美、望月一枝、妹尾理子、阿部睦子、  
金子京子、家庭科ふれ合い体験学習過程の可  
視化・共有化の試み：レッジョ・エミリア・  
アプローチを手がかりとして、家庭科教育学  
会、2013年 6月29日 弘前大学

〔図書〕(計 2 件)

望月一枝、倉持清美、妹尾理子、阿部睦  
子、金子京子(編著)、生きる力をつける学習  
~未来をひらく家庭科~ 教育実務センター  
2013、207

倉持清美(分担執筆)、家庭科教育(9章  
交流を通して視点を広げる授業づくり)、一  
芸社、2015、232(135-145)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ガイドブック作成

保育ふれあい体験を中心とした家庭科カリ  
キュラム・イノベーションガイドブック

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

倉持 清美 (KURAMOCHI Kiyomi)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：30313282

### (2) 研究分担者

妹尾 理子 (SENO Michiko)

香川大学・教育学部・教授

研究者番号：20405096

望月 一枝 (MOCHIZUKI, Kazue)  
日本女子大学・家政学部・研究員  
研究者番号：60431615